

2017 年 2 月

Societas Philosophiae Doshisha 企画

『Societas Philosophiae Doshisha 研究叢書』 (仮)
原稿公募要項

I 概要

Societas Philosophiae Doshisha（以下「SPD」という）の新たな企画として、『SPD 研究叢書』（仮）を創刊し、SPD 会員による研究の成果を広く内外に向けて発信していく。本書は、三部に分かれている。

○第一分冊

隈元泰弘・林克樹編

「ドイツ哲学 その脈動の軌跡——理性の深淵と祈望——」

○第二分冊

庭田茂吉・松葉祥一編

「現代哲学の非連続の連続——世界・身体・ことば——」

○第三分冊

加賀裕郎・新茂之編

「経験という概念——経験論の系譜——」

II 投稿要領

『SPD 研究叢書』に投稿を考えている会員は、本要項を読み、本要項に記載した各分冊の内容を勘案したうえで、執筆要領に従って、原稿を作成し、期日までに提出する。そのさい、どの分冊に向けた執筆であるのか、投稿先を明示しなければならない。

III 執筆要領

- 1) 投稿者は、SPD 会員に限る。
- 2) 原稿は、未発表の創作論文でなければならない。
- 3) 原稿は、註も含め 400 字原稿用紙換算 50 枚程度で作成し、どの分冊に投稿するの
かを明らかにしたうえで、紙媒体による完全原稿を下記住所に郵送する。その電
子媒体によるデータは、できるかぎり Microsoft 社の Word で作成し、下記メ
イルアドレスに電送する。
- 4) 2017 年 12 月 24 日（日）までに提出する。
- 5) 投稿された原稿を採択するかどうかは、各巻の編集者が決定する。必要に応じて投
稿者には原稿の修正ならびに訂正を求める。

【紙媒体】

〒 602-8580

京都市上京区今出川通烏丸東入ル

同志社大学文学部哲学研究室内

Societas Philosophiae Doshisha 事務局

【電子媒体】

Email: yosshima@mail.doshisha.ac.jp

研究叢書担当幹事 島田 喜行

IV 内容（第一分冊）

【編集者】

隈元泰弘・林克樹編

【主 題】

ドイツ哲学 その脈動の軌跡——理性の深淵と祈望——

【概 要】

カントにとって焦眉の課題は「理性の自己認識」、すなわち有限理性の射程と限界を明らかにすることであった。しかし、カントはその『純粹理性批判』においてすでに、「唯一にして全知全能の世界創始者を前提しなければならない」と述べた。理性の自己解明が、理性を透明化するまでに徹底されるとき、その時初めて、その見えざる背後が立ち現れる。ここにすでに超越論哲学の命運が垣間見えるとも言えよう。ドイツ観念論はこの見えざる背後そのものに呼応する信の立場に踏み止まることなく、再び知へと向った。その功罪を問うことには意味がある。根拠づけの徹底をとおしてドイツ観念論が得たものは何であったのか。根拠の思考が、理性の外なる、あるいは内なる深淵に接する時、そこにとどまるのか、さらなる先を求めずにはいられないのか。「最高善」をめぐるカントが心中に秘める理性の《祈望》とも呼ぶべきものを、ドイツ観念論は思考の全幅において明示化したのではないであろうか。

本企画の狙いは、ひとつには知のこの上ない《傲慢》にも見えるドイツ観念論の思考の根元にあるものをカントを起点として明らかにすることにあるが、それに止まらない。ドイツ哲学は果てしなくその前提を覆しつつ脈打ち続ける。ヘーゲル以後のドイツ哲学は、人間の有限性の意味を、全く新たな発想をもって問い直そうとしてきたのではないか。そこには有限な理性の内なる《祈望》に、自らの歴史性を踏まえて向き合おうとする思索の歩みがあるのではないか。これが執筆者に投げかけられた問いである。

【構 成】

本書は三部構成とする。以下、各部のテーマと趣旨を述べる。

第一部「カントと超越論哲学——有限理性の射程と限界——」。カントの超越論哲学の根本問題と、それがラインホルト、フィヒテにおいてどのように深化発展するに至ったかを考察する。

第二部「ドイツ観念論の葛藤——自覚の徹底と限界の突破——」。信の立場に甘んずることなく知への再起を企図したドイツ観念論の思索を、ヘーゲル哲学を中心に考察する。

第三部「根拠への問いの行方——覆る前提——」。ヘーゲル以降のドイツ哲学の現代にいたる脈動の軌跡を多彩な角度から浮かび上がらせる。

V 内容（第二分冊）

【編集者】

庭田茂吉・松葉祥一編

【主 題】

現代哲学の非連続の連続——世界・身体・ことば——

【概 要】

本書の趣旨は、今われわれが考えなければならないことを明らかにすることである。そのために、問題をしばって、二〇世紀初頭以降の現代哲学の三つのトピックスを取り上げる。世界の問題、身体・主体の問題、そして言語の問題である。われわれの狙いは、それらの問題の批判的検討から、次世代の哲学の創造の可能性を探ることにある。

哲学の創造は、広義の伝統との不断の対話から生まれる。不断の対話と言っても、試行錯誤や紆余曲折は言うまでもなく、飛躍や断絶や反復や否定を含む。要するに、創造を生み出す対話は非連続の連続から成る。本書では、この対話の起点を二〇世紀初頭におく。というのも、テクノロジーの問題と同様に、環境世界論や身体論や言語論を初め、第一次世界大戦を前後して、哲学の場面を一新する見過ごすことのできない議論が提出されているからである。

それらの議論の中から、まず、現象学を中心に深められた、周囲世界や生活世界の問題、次に、主観性の問題の具体的な展開である、時間、身体、他者の問題、そして最後に、他の学問分野ともリンクする、言葉、シンボル、記号、表現の問題を取り上げる。これらは、次世代の哲学の構想や創造を目指すうえでいずれも基本的な問題である。それだけではなく、現代哲学の一定の達成として、いずれもそこに独自性と創造性が認められるからである。

【構 成】

本書は次の三部から成る。

第一部 世界の問題：生世界論の批判的検討と新しい世界論

フッサール由来の生世界論の議論は何をどこまで明らかにしたのか。生世界論は、われわれの生きて死んでいくこの現実的具体的な「生の」世界をどこまで解明したのか。それはいまだどのような議論として継承されているのか。あるいは、継承されていないのか。さらにそれはわれわれの現在と未来にどのように関わることになるのか。これらの議論から、新しい世界論、すなわち、「世界に住まう」という考え方や「自然と共に生きる」という考え方の哲学的基盤を明確にする。

第二部 主観性の問題：時間・身体・他者論の批判的検討と哲学の現在

主観性を問題にするとき、現象学者たちにおいて、なぜ時間が問題であったのか。また、彼らは、主体としての身体という概念で何をどのように問題にしたのか。更に、レヴィナスを初め、他者の問題は、世界や自我や時間の問題に対して、何をもたらすことになったのか。以上の点から、今われわれが考えるべき哲学の課題を提示する。

第三部 言語の問題：二〇世紀における言語哲学の批判的検討とその彼方。

出発点としてのフッサールの『論理学研究』の言語意味論の検討。また、広く、記号論、シンボル論、コミュニケーション論等の観点から、哲学において「ことば」に関していま何が問題なのか。言語とその彼方という問題設定のもと、言語と非言語のあい、あるいは沈黙や音や発生の問題から、ことばや記号や表現の問題の真の所在を明らかにする。

VI 内容 (第三分冊)

【編集者】

加賀裕郎・新茂之編

【主 題】

経験という概念——経験論の系譜——

【概 要】

認識論という点からすれば、近代の哲学の潮流を合理論と経験論に区分できる⁽¹⁾。これらの教説は、「人間と非人間的實在の円滑な媒介関係を確保するために創始された異説である」⁽²⁾。すなわち、合理論と経験論は、人間という認識の主体と實在という認識の客体とのあいだの調停を採る二つの異なる考え方である。

人間が實在に接近する有効な手段として、合理論者は、非経験的な概念的準拠枠に訴え、経験論者は、非概念的な経験的内容に注視する。そのうえで、合理論者は、「實在の精確な表象を得るための」原理的な方法が人間にはあると考える⁽³⁾。これにたいして、経験論者は、そのような手段を幻想として退け、懐疑主義あるいは可謬主義に向かう⁽⁴⁾。

本書では、経験論に軸足を置いて、経験という概念の内実を析出させたい。しかしながら、経験論の展開は、けっして単線的ではない。経験の事実性に重きを置いてきた哲学者たちの歩みは、現代に至るまで、複線的であり、重層的である。たとえば、経験を感覚的な体験として認識論的な基礎づけの土台に置こうとする経験論がある。これにたいして、そのような基礎づけ主義を排除して、人間が学びをとおしてものごとくに熟達していく過程に経験の重要な局面を見ようとするひとびとがいる。あるいは、経験を捉えるうえで、自然主義と歴史主義を交差させていく視点に光を投げかけようとする研究者がいる。

このように経験を巡ってたがいに離接的であり连接的である経験論については、時代の区分に従って、三つの柱を立てることができる。第一に、ロックを端緒としてミルに連なる古典的経験論である。第二に、ヘーゲルの観念論に反旗を翻し経験的實在の回復を果たそうとしたムーアとラッセルの捉え方であり、ウィトゲンシュタインによって転換期を迎え、カルナップに至る論理的あるいは分析的経験論である。第三に、古典的経験論から出発しながらも、分析的経験論の問題性を抉りだしながら、経験の新たな批判的理解を提起しようとするプラグマティズム的経験論である。本書では、こうした三つの視角から、経験とはなにか、という経験論の基本的な課題を、通時的に、かつ、共時的に考察する。

※註

(1) 加賀裕郎、「'Empfindung'と'Erfahrung'との間—文化的自然主義のほうへ—」、『日本デューイ学会紀要』第56号、109頁。

(2) 同論文、109頁。

(3) 同論文、109 頁

(4) 同論文、109 頁

【構成】

本分冊は、つぎのように三部に分かれている。各内容を読み、どの部門に投稿するのか、執筆の方向を確認されたい。

第一部 古典的経験論

ベーコンから始まり、ロック、バークリー、ヒュームが確立し、ミルに至る古典的経験論の系譜に帰属する哲学者が経験をどのように捉えたのか、経験という概念の古典的な理解とその現代的意義を捕捉する。

第二部 論理的経験論

ムーアとラッセルの唱道した分析的手法、ウィトゲンシュタインが提起した言語論的転回、こうした二〇世紀の新たな動向が経験という概念にもたらした影響の意味を考え、論理的経験論の主題を洗いだす。

第三部 プラグマティズム的経験論

ヒュームの立場の徹底化が根本的経験論であると主張するジェイムズのように古典的経験論の系譜にあったプラグマティズムが初期の時代から現代に至るまで経験という概念に提起してきた課題を見さだめる。